

C-10 乳児期の栄養条件と児童の知能発達及び身体発達との関係(Ⅱ)

宮崎大 教育 ○ 秋山露子

目的 乳児期の自然的又は人工的栄養条件と児童の知能発達及び身体発達との関係について検討するものである。前報において1960年以來1975年に至る乳児期の栄養条件の表化に合せて生後六ヶ月以内の栄養法(母乳、混合、人工)と知能発達及び身体発達との関係について報告したが本報は栄養条件として生後一年経過後、調査年月日まで毎日牛乳を飲用し続けた群と時々飲用した群及び全然飲用しなかった群との三群にわけて知能発達及び身体発達との関係について今日までの調査結果を總括的に検討するものである。

資料 調査対象児は1949年から1972年出生児まで7994名である。知能発達は各年令個別に測定された知能検査による知能指数を知能偏差値に表えて用いた。乳児期の栄養法は生後六ヶ月以内の栄養法を母乳栄養、混合栄養、人工栄養群に分類し、又牛乳の飲用条件は生後一年経過後調査日まで毎日牛乳を180cc 1本又はそれ以上飲用した群、時々飲用した群、全然飲用しなかった群の三つにわけた。身長、体重は学年毎始めに検査測定された資料を基にした。母集団の分散の均一性については下検定を用い、その平均の差は上検定した。相関関係は上検定により検討した。(各群に於て既に検定された資料を用いた。)

結果 乳児期の栄養条件が自然的、或は人工的表遷によって平均知能にも表化が認められた。毎日牛乳を飲用している群の平均知能は最も高く、知能偏差値上位(155.60±)と(155.50±)との関係は明らかに危険率1%~5%で有意な関係がある事が認められた。又身体発達との関係も概ね毎日牛乳を飲用している群が成長が最も良く、有意な関係が知能発達との間でも認められた。知能発達及び身体発達は明らかに栄養条件にも関係がある事を認めた。